（様式1）

令和4年度　学力向上指導改善プラン

母子小学校長　川嶋　弘則

学校教育目標	ふるさとを愛し　よく考え　心豊かに たくましく生きる　児童の育成
推進主体	管理職と主幹教諭、研究推進担当（学校改革推進教員）、生活指導担当を中心に学力向上委員会を設置し以下の取り組みを実施。

			学力に関する前年度の状況・経年の課題等	4月 学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標 （指標となる数値等）	具体的な行動目標 （成果目標達成のための具体的な手立て等）	2～3月 年度末評価 （今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況 （国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む）	国語	○全校生によるビブリオバトルや教職員によるブックトークにより、低・中学年の図書室や移動図書館の利用率が上がっている。高学年の図書室の利用率は、個人によって差がある。 ・週1回の漢字アタックに向けて、書く練習を積み重ね、小テストの正答率は上がっているもののまとめのテストでは、漢字の定着に個人差がある。 ・書く活動を全学年意識して取り入れているものの語彙が少ない児童が多い。	○書く・話す活動の充実 ○言語力の向上 ○読書活動の充実 ○根拠を明確にして発表する力をつける。	・書くや話すことを通して、表現力を向上させる。 ・漢字や語句の意味などテストにおいて80%以上の正答を目指す。 ・家庭での読書を含め、月8冊で年間100冊以上の読書量を目指す。 ・「根拠となる部分」を明確にして発表することができる。	・授業内で自分の考えを書く場面を積極的に取り入れ、自分の考えをまとめる機会を作る。また、文集やポスター作りなどを通して相手意識を持って書くことができるようにする。 ・「めあて」や「ふり返り」を教科や特別活動で行い、全校生の前で意見や感想を述べる機会を設ける。 ・毎日の授業や宿題等で漢字を書く機会を設け、週1回の漢字アタック（漢字テスト）で成果を確認し定着を図る。辞書やタブレット端末を有効的に使い語彙力を増やす。 ・ビブリオバトルやブックトークの活動を継続し、母子家庭読書の日を設定することにより、読書活動の充実に努める。 ・国語を中心に根拠となる部分を見つけて発表ができるようにする。また、学年に応じて図書やインターネットから情報を集め、必要な情報を取り出してまとめる活動を取り入れる。	・朝の会や授業中に書く場面を意識して取り入れることによって、書くことへの抵抗が少なくなっている。 ・「めあて」や「ふり返り」はどの場面でも意識して行うことができ、子どもたちが1時間を見通して授業に臨めている。 ・全学年の児童が週1回の漢字アタックに向けて、授業や家庭で漢字を書く練習を積み重ね、その効果が表れている。今年度は漢字アタックの正答率は90%が8割であったが、1度覚えた漢字は忘れないように定期的にハテストをしたり、各教科の中で書くことをさらに取り入れたりして、漢字を使う場面を意識した取組を行い、漢字まとめのテストの正答率を80%以上に高めていく。 ・書く力を活用した取組は、全学年意識して進めることができており、各学年の実態に合わせた作文力をつけてきている。 ・言葉の力（語彙力）の弱い児童もいるので、読書活動や体験活動とつなげながら言葉の力をつけていきたい。また、相手を意識した伝え方、コミュニケーションの力をつける取組を今後も続けていきたい。	B
		算数数学	○算数でのひとり学習やおたずねの取組等により、考える力が伸びてきている。 ○朝の計算アタックを継続することで、個人差はあるが四則計算などの計算力が伸びてきた。 ◆根拠となる部分を選ぶことや、記述を要するような説明問題が弱い傾向にある。	○基礎基本となる計算力（四則計算）のさらなる向上 ○ひとり学習の工夫 ○算数での書く力を伸ばし、ホワイトボードや板書だけでなく、タブレット端末を利用し「おたずね」（説明）する力を高める。	・週3回以上の計算アタックに取り組み、計算力の定着と基礎学力の向上を図る。朝休みや放課後等の時間を利用し個別指導を行い、算数のまとめテストの正答率を80%以上に高める。 ・毎日算数のひとり学習に取り組み、授業の構えを作ると共に、工夫したノート作りをめざす。 ・「おたずね」を通して学びを深めていく。また、大切なことを板書に残し、学びの質を高める。	・計算アタックでは記録を残しグラフ化することにより、自分で伸びを実感しさらにやってみようとする意欲につながっている。今後も「見える化」を意識しつつ、個に応じた問題や苦手な部分を補うなど、個別最適化を目指して今後も続けていく。 ・低学年のうちから、四則計算を基にした計算問題を行うことにより、力をつけていっている。引き続き家庭と連携しながら継続したい。 ・分からないところをはっきりさせるのも「ひとり学習」の大切な活動であり、分からないことがあれば聞く児童も増えている。引き続き「めあて」を立てるところまでは、自力で行っていけるように、朝の時間等で支援していきたい。 ・多くの児童が式だけでなく、図や表、グラフ、線分図など、式とつなげて考えたり発表したりすることができるようになってきている。また、既習事項を活かして考えようとしている。多角的に捉えることができるように今後も教材研究や教師の出場等によって深めていきたい。	・計算アタックでは記録を残しグラフ化することにより、自分で伸びを実感し、苦手な課題についても意識し取り組むことができた。さらに今年度は、週に1回（金曜日）にドリルパークを取り入れることで、興味関心を持って意欲的に取り組むことができた。今後も「見える化」を意識しつつ、個に応じた問題や苦手な部分を補うなど、個別最適化を目指した取組を続けていく。 ・低学年のうちから、四則計算を基にした計算問題を行うことにより、力をつけていっている。引き続き家庭と連携しながら家庭学習を充実させたり、放課後の個別支援等を行ったりするなどして、算数のまとめテストの正答率を80%以上に高めていく。 ・分からないところをはっきりさせるのも「ひとり学習」の大切な活動であり、分からないことがあれば聞く児童も増えている。一方声をかけないとそのままにしてしまう児童もいるため、引き続き「めあて」を立てるところまでは自力で行っていけるように、朝の時間等で支援していきたい。 ・多くの児童がICT機器など様々な教具を使い、表、グラフ、線分図など、式とつなげて考えたり発表したりすることができるようになっている。	A
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		◆簡単な計算間違いをしがちで、説明を要するような問題が弱い傾向にある。（経年） ◆児童一人ひとりの「つまずき」の確認、きめ細やかな指導をする必要がある。	○個別指導の充実 ○授業の進め方の改善	・返却されたテストの誤答した部分を中心に個別支援を行い、個に応じた理解をめざす。 ・漢字や語彙力、四則計算等の基礎基本の定着を図る。	・放課後や休み時間等を利用して、弱い部分の補充や漢字や計算の基礎基本の定着を行う。 ・タブレットの画像を見せるなどして語彙力を伸ばすとともに、算数以外の授業や朝の会等でも「主体的に考える」「書く力を伸ばす」授業を実践していく。	・休み時間や放課後の時間などを利用して、学力補充をおこなうことにより個別最適化の学びにつながっていっている。今後も続けていく必要がある。 ・電子教科書やタブレット端末を使用した授業の導入により、学年が上がるにつれてタブレット端末を使った資料の提示や大型画面を使った発表など、表現の幅が広がってきた。今後、全学年に電子教科書を導入するなど、低学年のうちから使い慣れてしてことが必要である。	B
	授業等からうかがえる状況（各教科）		○どの教科でもめあてやふりかえりを行い、行事等でも活かされるなど定着している。全員の児童が算数を楽しいと感じている。 ◆自分の意見はもっているが、体験や人と会う経験が少ないため語彙力が少ない。また、相手の意見に付け加えて自分の意見を発言することが少ない。	○算数のガイド学習を中心に自分たちですめることに自信を持たせる。また他教科や特別活動でもガイド学習を活かした授業を行っていく。 ○分かる楽しさや充実感を得るような授業づくり	・めあてに沿ったふり返りが行えるように活動中にめあてを意識させて「おたずね」を行う。 ・児童アンケートで「授業はよくわかる」「算数は楽しい」の割合を90%以上にする。	・教師の出場により、めあてや既習事項を確認し、子どもたちですすめることができるように「おたずね」等で支援する。既習事項の掲示物を活用する。 ・算数では時間配分を大切にし本時の本質に迫り、適応題やふり返りを含めて時間内に終わるように、進行の補助を行う。他教科や特別活動にもガイド学習を取り入れる。	・教師の出場（でば）については定着しつつある。、今後も研究を積み重ねながらガイド学習を他教科に活かしていくなど横断的な取組として活かしていきたい。 ・算数の授業において、時間をかけるところと、時間をかけなくても確認するだけでいいところなどがある。授業のどの部分に重点を置くかについては、教材解釈や教材研究、授業研究によって全職員で共通理解をしていくことが大切である。共同学習者においても、どの部分を子どもに発表させるかを考えながら進めていきたい。	A
学力向上に係る学習習慣等の状況	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況		○学習意欲・生活習慣については良好と判断できる。 【100%だった項目】 ・教師への信頼感 ・いかなる理由でもいじめはいけない ・朝食を食べている。	○家庭における学習習慣及び生活習慣の定着・向上	・家庭学習が充実や習慣化、定着するよう子どもたちを指導し、通信等で家庭に発信していく。 ・「月に本を読む冊数が5冊以上」の児童の割合90%を目指す。 ・生活リズムを整え計画的な学習習慣を定着させる。また、情報モラルの授業を今後も続け、タブレットの正しい使い方をさらに深めていく。	学校便りや学級通信、家庭学習の手引き等を活用し懇談や家庭訪問等で保護者に啓発していく。また、保護者との連携をとっていく。 ・「母子家庭読書の日」を20日だけでなくその週1週間とし、読書活動を推進していく。「ビブリオバトル」や「ブックトーク」で表現力を豊かにしていく。 ・保健指導や保健便り、保健の授業、学級通信等で生活習慣や健康に関する情報発信し啓発していく。情報モラルの授業を今後も継続していく。	・児童アンケートや保護者アンケートから家庭学習の習慣が定着しつつある一方で、家庭の協力が必要なケースもある。引き続き家庭と連携して取り組んでいきたい。 ・読書については本年度も二極化が見られるものの、ビブリオバトルやブックトークなどの取組や司書教諭との連携によって改善に向かいつつある。「月に本を読む冊数が5冊以上」の児童の割合が今年度は81%であったため、教師によるブックトークや読み聞かせなど、引き続き本の楽しさを伝える活動を行い、90%以上に高めていく。 ・保健指導や掲示板を使っての啓発により子どもたちや保護者の意識は高まりつつある。継続して取り組んでいく。	B
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		○1日平均70分家庭学習を行っている。ひとり学習をほぼ全員が行ってきている。 ◆「お家の人に学校や友だちのことを話していない」児童の割合が2割いる。	○家庭における学習習慣及び生活習慣の定着・向上 ○家庭でのコミュニケーションの充実	・「月に本を読む冊数が5冊以上」の児童の割合を90%に高めていく。 ・「お家の人に学校や友だちのことを話している」児童の割合を100%に高める。	・学校だよりや学級通信、懇談会、学校地域運営協議会等を活用し啓発を行っていく。	・学校評価の結果を保護者や地域運営協議会で話をすることができ、学校の思いや教育のねらいを昨年度よりも伝えることができている。これからも学校評価の時期だけでなく、保護者や地域の方との普段の会話やHPを通じてさらに学校の様子を伝えていく。	
校内研究・研修の状況	校内研究の状況		◆今までの算数科の研究を引き継ぎながら、「書く力を伸ばす」「教師の出場」や「書く（描く）」ことに取り組む必要がある。	○校内研究の充実とガイド学習の工夫と発展 「子どもがつくる算数科学習」	・来年度の全国へき地大会を見据え、「子どもの深い学びをめざしたつなぐ力の育成」に沿った研究活動を推進する。 ・算数を中心にどの教科でも「おたずね」を通して「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点で授業改善をすすめる。	・全員が年間3回以上は授業公開を行い、ガイド学習の発展と「教師の出場」や「板書（児童の表現力）」「教材研究」などの課題克服に向けた取り組みを行う。 ・「おたずね」を通して、授業が深まるように、どの授業でも意識し、部分的ガイド学習を取り入れるなど、学力の向上に取り組む。 ・タブレット端末を取り入れた授業の工夫	・本年度もコロナ禍で制限された部分も多い中ではあったが全員が1人3回以上授業公開を行うことができた。 ・各学年の実態に合わせて、タブレット端末を使っての説明や、高学年はデジタル教科書を大型テレビに映して説明するなど、意識して活用することができていた。今後はどのような教材内容がタブレット端末で学習するのに有効か、また、書く力に重点を置くべき学習は何かの研修を積み重ね子どもたちの力をさらにつけていきたい。 ・算数のガイド学習の取組が他教科でも活かされている。すべてではないが一部を活かし、国語や社会など、ガイドで進めている学年も出てきている。今後も活かし発展させたい。 ・ミライシードのドリルパークを週1回以上活用することにより、定着しつつある。今後はミライシードのオクリンクやムーブノートを使い、学力の向上に努めたい。	A
	校内研修の状況		◆「子どもの深い学びをめざしたつなぐ力の育成」をのテーマに沿って、講師を招聘し授業力の向上を図る必要がある。 ◆ICT機器を活用を取り入れた、授業実践研修を行う必要がある。	○ガイド学習を活かした授業研修 ○ICT機器を活用した授業実践	・算数を中心にどの教科でも「おたずね」を通して「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点で授業改善をすすめる。 ・1日に1回以上はICT機器を活用した授業や朝の会等を行う。	どの教科でもガイド学習意識した授業を行うなど、「主体的に考える」力を伸ばしていく。 ・タブレット端末を取り入れた授業の工夫・改善を行い、ミライシードも活用し学力の向上を図る。		
家庭・地域等の状況	家庭・地域等の状況		○学校・学級便りやHP等により、有効な情報発信を継続している。 ◆より一層、地域人材を活用し、連携を図りながら一体となって進めていく必要がある。	○通信やHPを活用した子どもたちの様子の発信。 ○地域人材の発掘、整備	・週1回の学級通信、学校便り、HPで子どもたちの様子を掲載する。 ・教頭及び学校改革担当教員が窓口となり、地域の人材バンクを整備して新たな人材開発に取り組む。	・通信を通して学校や学級、学習の様子、行事の案内、準備物、1週間予定など積極的に発信し、家庭での話題となるように努める。 ・活動の意義を伝え、地域で仕事をされている方や学校地域運営協議会など連携を密にし、活動に対する考え方を共有する。	・学校や学級が積極的に情報発信を行うことにより、保護者アンケートでは昨年度よりもよい結果となっている。引き続き情報発信を行い、家庭の話題となるように努めたい。 ・各学年それぞれ地域の方を訪ねたり、講師としてお招きしたりしてふるさと学習に取り組むことができた。じゃがいもやサツマイモ、そば、夏野菜、冬野菜の栽培、収穫、また、そば打ちなど地域の特色を活かした取組を行うことができている。	A
家庭・校種間連携	小・中における教科連携等の状況		○小中間での資料等の提供、出前授業の取組を通して、児童生徒の理解を図り、連携が密になりつつある。コロナ禍で制限がある中では、zoomで交流するなど新しい形での連携を工夫して行っている。 ♦相互の研究会等への参加、出前授業の取組を継続していき、さらに連携の強化を図っていく。	○幼稚園、小学校、中学校の11年間の連続性を共有した学校園所連携の推進	・幼小交流や小小交流、小中交流、小規模校交流を積極的に推進する。各学年、年1～2回小規模を活かした交流を行う。 ・学期に1回（年3回）以上、幼小中連絡会を開催し、前年度の成果と課題を受けた取組を推進する。	・自信を持って行動し、他校の児童と積極的に話すことができる活動（授業交流、zoom交流）を工夫して行う。 ・研修会、研究授業等に1人1回以上積極的に参加し、授業改善を図るとともに、幼小連携、小小連携、小中連携を推進する。 ・キャリアパスポートを活用し、小・中・高までの連携を図る。	・学期に1回中学校区において小中校長会・教頭会・生徒指導・キャリア教育・情報教育担当者会等を開いて、連携の方針や課題について共有することができた。 ・各学年、年に1～2回小規模を生かした交流を行い、自信を持って行動したり、他校の児童の前で積極的に発言したりすることができた。 ・夏期の中学校区合同研修会では、幼稚園から中学校までの職員が集まり日ごろの子どもたちへのかかわり方を見直す機会を持つことができた。 ・今後も相互の研究会等への参加、出前授業の取組を継続していくとともに、出前授業においては、事前の打ち合わせを行い意思疎通を図る。 ・小中連携において決定した校区の目指す子ども像「みんなで育てよう」を具体化・活用していく方法を探っていく。	B